

砂川市高齢者いきいき支え合い記念事業

～あなたのいきいき みんなでささえあい 大作戦～

## 記念講演会講演録

○日 時 平成25年6月14日（金）午後2時

○場 所 砂川市地域交流センターゆう 大ホール

○出席者 100名

○講 師 哲学者・札幌大学名誉教授 鷲田 小彌太 氏

○演 題 いつまでもいきいきと暮らしていくために ～毎日を快適に生きる知恵～

### 【司会 藤原 佐智】

皆さんこんにちは。予定の時刻となりました。本日は「砂川市高齢者いきいき支え合い記念事業 ～あなたのいきいき みんなでささえあい 大作戦～ 記念講演会」にお越しくださいましてありがとうございます。本日の司会進行を担当させていただきます、藤原佐智と申します。よろしくお願い致します。

それでは記念講演会に先立ちまして皆様に二点ほどお願いがあります。まず一つ目は、お渡ししております封筒の中にアンケートが入っております。講演会終了後、アンケート用紙にご記入いただきまして、お帰りの際、受付に用意しております回収箱で回収させていただきますので、どうぞご協力をお願いします。二つ目になりますが、携帯電話や音の出る時計など他のお客様のご迷惑となりますので、電源を切るか音の出ない設定にさせていただきますようお願い致します。皆様のご協力をよろしくお願い致します。

それでは記念講演会の開催にあたり、主催者を代表して砂川市長、善岡雅文よりご挨拶申し上げます。

### 【砂川市長 善岡 雅文】

皆さん、こんにちは。雨にもかかわらず、砂川市高齢者いきいき支え合い事業記念講演会に足を運んでいただきまして本当にありがとうございます。

昨年、「砂川市高齢者いきいき支え合い条例」、これを議会に上程しまして、今年4月に施行いたしました。一つは、これからどんどん歳をとる高齢化時代、地域で高齢者を見守りましょうとそのようなシステムでございます。もう一つは、こちらのほうが大事かもしれない。皆さんがいつまでも元気で歳をとっていく、そういう砂川市にしましょう、この二つが基本方針でございます。

今年4月からは市のほうで高齢者台帳を作成しておりまして、65歳以上の高齢者の個人情報、4情報を希望する町内会に社会福祉協議会を通して提供しましょう、それプラス災害、要援護者、身体の悪い方、こういった方々を挙げていただければ、それを高齢者台帳に登録する、その作業を進めておりまして、7月頃からは砂川市の担当セクション、

ここが司令塔となりまして、市、社会福祉協議会、町内会連合会、そして民生児童委員、更には地域包括支援センター、このような方が中心となって地域別に活動していきます。更にそれよりも大きい輪で、例えば、配食サービスそのような団体の方がそれを補完してくださると。今日午前中、134事業者ですか、砂川市内の事業者の方に登録をしていただきまして、色々な事業をやられる方がその事業を通して地域を見ていただいて、気づいたことがあれば地域包括支援センターに連絡をしていただき、事業者の役割はそこまで、団体は色々見ていただき、何かあれば地域包括支援センター、そして市と一緒にそれに対応していく、そういう仕組みでございます。

今日は札幌大学名誉教授・哲学者の鷺田先生、講演名は「いつまでもいきいきと暮らしていくために」です。先生よろしくお願ひ致します。後には質疑応答のお時間もでございます。どうかご清聴いただきまして、後で色々質問をいただければというふうに思っております。

厚生労働省の資料によれば、団塊の世代と言われる方々が65歳を越えてきました。昭和22年から24年生まれの方が団塊の世代と言われますけども、戦後一番子供の多い時代、ここが本来高齢化社会のピークに来るのかなというふうに思っておりましたら、厚生労働省の資料によると団塊のジュニア世代、その子供達の時代のほうがピークが大きくて高齢化率が高くなっていく、それは2050年から60年頃、あと4、50年あるわけでございますけども、そこがピークだそうでございます。まだ高齢化社会は4、50年続く、ですから高齢者という言葉はもうそのころには周りは高齢者がいっぱいですから、高齢者という言葉ではないかもしれない。ごくあたりまえのようにみんながその中で生活している、そんな時代が続きます。ですからここで砂川市はしっかりと高齢者を見守り、元気である仕組みをちゃんと作って、我々の次の世代にもそれを伝えていかないといけないと思っております。

どうぞ講演を契機に色々と考えていただきまして、皆さんと共にまちづくりをやっていると思っております。ありがとうございました。

#### 【司会 藤原 佐智】

善岡市長、ありがとうございました。それでは、早速講演会を始めさせていただきます。まず本日の講師であります鷺田小彌太先生をご紹介させていただきます。鷺田先生は昭和17年札幌市でお生まれになり、大阪大学文学部哲学科を卒業、同大学院博士課程を修了され、その後、三重短期大学教授を経て、昭和58年に札幌大学教授とられました。

昨年3月に退任され、現在は札幌大学名誉教授としてご活躍中でございます。

著書には、『大学教授になる方法』、『自分で考える技術』、『「やりたいこと」がわからない人たちへ』などのほか、シニア世代への提言も多く『定年と読書』、『定年と幸福』、『老後に備えない新哲学』など、高齢社会を生きる私たちにとって参考になる著書も多く、書評、評論、人生論など200冊以上執筆されております。

本日の講演のタイトルは「いつまでもいきいきと暮らしていくために 毎日を快適に生

きる知恵」です。それでは、鷺田先生どうぞよろしくお願い致します。

**【講師 鷺田 小彌太】**

あまり、教壇でも話すのが好きではなくて、お見苦しい事になるかもしれません。

皆さんのお手に渡っていると思いますが、その1枚の紙は私のメモ用でありまして、面倒臭いような事が書いてあると思うのは無視してください。なるべく解りやすい言葉で話そうと思います。

ここで私がお話したい事のほとんど全ては私の経験を通したものです。現在71歳ですが結構いい歳になって、なお且つこういう所で皆さんの前に自分の生き方を披歴するのは恥ずかしいですが、少しは参考になるような事があればと思ってお話したいと思います。

最初に私の思想というか物の考え方、東日本大震災の3日前に亡くなられた谷沢永一先生がいますけれども、その先生は25歳くらいに大学の教師になってから、61歳で自分で職を辞めるまでずっと学校に居ました。ほとんど世間の雑事に関わらなかった先生でした。しかし先生の本を読みますとあるいは先生とお付き合いさせていただきますと、とても人間通、世の中の事が解るし、それから人間の事が解るのです。別に口に出さなくても、先生の判断された事が本当に人の理解とか心根というものをおもんばかっていくのですね。書物の世界では谷沢先生は辛口評とあって、人に嫌われるような事を簡単に「こんなものはゴミである」、「こんな書物をよく書くな」、「読まない方がいいですよ」みたいなことを簡単に言う先生で、毒舌家で通っていましたが、大学の教師というのは、私もその一員でありましたが、世間の事は知らない、とっちゃん坊ちゃんであるというふうに使われてまさしく結構であると思います。私もまたそういう一人ですが、でもよくよく世の中の事を観察し、よくよく人とのつきあいを観察している、そういう人もたまにはいるのではないかなと思います。大学の先生になれなかったけれども、私の知る限りでは司馬遼太郎という人がいます。作家ですね。私と同じくらいの歳で亡くなりましたが、司馬さんは「人間通」という言葉を作りました。人間の事が良く解るっていう意味です。司馬さん自身は一時、新聞社の記者になりましたが、その他は学生生活と若干の軍隊生活と後は作家です。しかも東大阪と言って大阪の一番東側の汚い所にずっと住み続けられて東京に一度も住まなかった先生なのです。したがって、社会の事、世の中の事は、実際司馬先生は何にも知らないと思います。だけど社会の事を、それから人間の事について、非常に実に詳しく丹念にそして精密に観察して、それを様々な小説とかエッセイに書かれています。一度読んでみられたら良く解ると思います。司馬先生が人間通と言われたのは、豊臣秀吉の事をまず挙げれば良いと思いますが、秀吉という人は、別に学歴も身分もないし、出自も悪い、顔も更に悪いのですね。しかし、人に嫌われない、愛嬌がある。そしてもっとすごいのは誰もが嫌う仕事を自ら進んでやる。死地に赴くと言いますが、秀吉はとりわけ剣が強かった訳でもないし、とりわけ戦略家ではなかったですけども、一番人の嫌がる事をやって、そして彼は信長の後を引き継いで天下を取る訳ですけど、その秀吉を人間通の見本だと言っています。惚れ惚れすると。こういう観点から私の話にちょっとだけ耳を傾けて

ほしいと思います。

一番最初に「いつまでもいきいきと暮らしていく」。非常に簡単であります。なぜかという、自分がいきいきと毎日を暮らせばいいからです。誰に文句も言わないで、自分自身がいきいきとすればいいですね。つまり、自分自身が楽しい存在になる。自分自身がいきいきとしているということが、重要。社会がどうであろうと、それから周りがどうであろうと、自分の連れ合いがどうであろうと自分がいきいきとして生きていくという、そういう暮らし方が出来れば、これはそんなに難しい事ではないと私は思います。そういうふうにおまへは生きていくと言われるとそうでもないですが、私の知っている限りの人と比べれば、少しはいきいきと暮らしているのではないかなと思います。

その一番いい例は、何が一番人間にとって楽しいか、いきいきと出来るかと言うと、これはもう答えは一つしかありません。働いている時が一番楽しいです。自分の仕事をしていて「いやあ役場の仕事なんて全然面白くない」、「農業なんて暑くて苦しくてそんなもんやっていたらウンザリだ」とか「学生勉強なんてそんなの嫌だ」、そう思ったらまさしく地獄のようなものですけどね。でもどうでしょうか。農業をやっていた人が農家を辞めて、金もあるからただ遊んで暮らしていけると思ったら、その人はほとんど気力も失せてしまう、活気が失せてしまう。「市役所の仕事なんて嫌だ。9時から5時まで働くな」という人がこれを辞めてすっきりするかというと逆にノイローゼになります。私も哲学を学びましたし、自分でも書いていますが、どんな哲学書にもそれは書いてはいませんが、その日起きて仕事を持ってそれを始める、そういう時が一番幸せなんだ。そういう格言を書いた人がいますが、これは日本人も沢山いるし、それから儒教とか中国の古い古典の書物の中にも書いてあります。そうでなければ自分でやっている事が好きでなければ、駄目なのです。「そんな自分がやっていて楽しい事なんてないよ」と言うけど、楽しい事が無いというふうに思う事が、私はちょっと違うのではないかなと思います。

私は18歳の時に、北海道札幌の一番外れの厚別にいまして、高校時代は東大に行く程ではなかったかもしれないけれども、そうでもないくらい出来たのです。だから大阪大学なんて無名大学でしたけれども、その頃1960年でした。「大阪大学なんて受かりますよ」と先生が言うから受けたら落ちたのですね。自分では信じられなかった。私が落ちるなんて事は有り得ない。次の年また受けたら、また落ちたのですね。辛かったですよ。ものすごく辛かった。だから2年間北海道に帰れなかった。最近浪人という言葉はないけれど、人間ではない、名前もない。予備校に行ったら番号で呼ばれる。そういうふうな時に、じゃあこんな嫌な事から逃れたら楽しいかと言うと、そうでもないなと思う。今考えてみたら、朝起きて勉強して夕方止めて、少し休んでからまた勉強する。そういう習慣がずっと付きましたから、今でも朝5時くらいに起きて仕事が始まります。何も考えなくても始まる。実は受験勉強をしなかった人が一番辛いのは、朝早く起きてすぐ自分の仕事を始める、そういう習慣が、しかもそれを持続してやる習慣がないのですね。だから受験勉強したからと言って頭が良くなる訳ではありません。知識が沢山つく訳ではありません。だけど、そういう働くという、仕事をするという、そういう心構えとスタイル、習慣が身に付くの

ですね。これは私が一番大きな、自分が色々な失敗を重ねましたけれども、これは嬉しいなと思った習慣です。

孔子という人は「15歳になったら学問を始めなさい。それまであまりするのではない」。どういう事かといいますと準備をする事です。35歳くらいまで準備です。だから皆さんのお子さんがいたら、35歳くらいまで勉強の準備だとあるいは仕事の準備だと思っただけです。しかし、65歳を過ぎて仕事の準備をする、あまり無理したら駄目です、壊れますから。だから、仕事をしたらいいって言うけど今までやってきた仕事の中で、自分に一番似合うような仕事を選んで、それをお金になるかどうかは別として毎日続けていく。その中から自分が発見したものを選んで積み重ねていく。こういう事が生活の中にきちんとあったら、そんなに朝起きて今日何しようか、ゲートボールしようか、レストランに行こうとか考えなくてもいいのではないかと思います。

朝起きたら今日はこれしよう、出来れば今日はこれをしようと紙に書くのです。紙に書いたってそんなたいしたことないじゃないか。計画を立てるのです。人間というのは面白い動物でして、私も5年くらい前、太りすぎてダイエットを始めたのですが、たいしたことないんですよ。ただ朝、秤にのって自分の体重を見るのです。一番太った時78kgくらいありました。そうやって2年間くらいずっとやって70kgくらいになった。自然と自分で自分をコントロールしていく。これが非常に簡単なのです。毎朝、自分のやろうと思った事を気を付けてやる。時間は長いかわりか短いかわりかは関係ない。ここに書きましたが、ヒルティという人の世界で一番良い幸福論であります。スイスの人で、坊さんでしかも法学者です。政治運動を少しやった人です。この人が、「今日、起きてすぐにやる事がある、それが幸福の最大で一番の事だ」というふうに言っていますが、私は45、6歳の時にそれが解りました。遅いのかもかもしれませんがね。でも決して遅くない。つまり、私達が何が楽しいか、いきいきしているかっていうことは、そんなに難しい事ではなくて、自分がいきいきする方法は自分の仕事を持つ事だ。これが、非常に単純で簡単な事です。しかし、それを実現するのはそんなにやさしい事ではないと思います。自分の好きなことは皆探します。今やっている事ではない事が人間は割と好きなのです。自分の奥さんがどんなに綺麗でも、隣の奥さんが綺麗に見える。「隣の芝生は美しい」という格言です。それと同じで人の持っているものが羨ましくなる。これは人間の欲望の一つですけれども、でもそれはそれで良いと思う。ただ自分のやる事は朝起きたら決まっている。こういう人生っていうのは、なかなかいいなってことを頭に刻み込んでください。

もう一つ言いますと、日本を一番理解してくれた外国人の一人にドラッカーという人がいます。経済学者であるし経営学を創った人だと言われています。オーストリー生まれで高校の時にオランダに留学して法律学校に行って、働きながら新聞記者をやって、そしてそこで自分の能力に目覚めてヒトラーを批判するのですね、書物を書いて。オランダやドイツにいられなくなって、まだ若い20歳くらいでイギリスに逃げました。そこで自分がオランダ時代に好きだった大学生の同級生と出会って、二人でニューヨークに逃げて、そしてニューヨークで新聞記者をやりながら勉強して、経済学、経営学、マーケティングを

やってですね。私自身では20世紀の最大の思想家の一人だと思っていますが、その人は日本びいきです。最後の著書があります、「ラストワード」。著書というか、インタビューに答えたもので、それは日本論です。日本人は74歳まで働ける。実際に74歳まで働く能力がある、いきいきと働ける。定年があるから働けないとか、会社が潰れたからもう働けないとかはそういうのは悲しいですよ。だけど、定年があろうと会社が無くなろうと、自分のしたい事を見つけて、そこで暮らしを立てる努力をしていく。

今の30代の人達は、働く事があまり好きではないのです。本当はそうではないと思います。自分のやっている事が評価されないから非常に辛いのです。だからお金が無いって言うのです。僕が30代の時には、まだ就職出来ていませんでしたから、アルバイトしながら子育ては奥さんに任せてですね、アルバイトといっても朝から夜の10時くらいまで、一週間ずっと大学の非常勤講師をやっています。収入は低いですけど、日曜日までやっていますとかなりの額になります。でもあまり辛いと思った事はないです。これが自分のやりたい事を成し遂げるためのワンステップであるというふうに思っていたのです。つまり、お金がなかったら別な収入口を探してアルバイトすればいいというのが私の意見です。もう仕方ないですね。それか支出を減らす。そのどちらかです。これは、個人で出来るベターな生き方だなというふうに思っていますから。私はある時、ベストセラーを書きまして、毎週何百万というお金が通帳に入ってくる。すごいですよ。おかしくなってしまう。だからどれだけ使っても無くならないから、ススキノでずいぶん飲みましたけれども。もちろん泡のように消えましたけれども。それが、私の不幸の中の一つだったとは全然思いませんが、そういう事も記憶の中に留めながら、自分のやりたい事をやる。

それと反対の事を少し言った人がいるのです。ゲーテという人は、昼の労苦。昼は一生懸命働いて、夜は徹底的に遊びなさい。これが文豪ゲーテの考え方。実際にそうしたのです。ちょうど団塊の世代の子供達、40歳前後です。その子達は、まず自分の楽しい事をするんですね、それから余ったら辛い事をする。私達はゲーテのようにまず辛い事してから楽しい事をする。ところがそうやると辛いことが私の身に付いてくる、習慣になって、それが普通になってそれをしていないと逆におかしくなる。これがこれまでの社会の生き方でしたけれども、40代くらいの世代はそういう生き方をしてくる必要がなかったから、随分違うのです。そういう人達はこれから難しいと思います。まず楽しい事をしてから嫌な事をしよう、そうすると嫌な事はいつまでも習慣にならないのです。だから電車に乗って会社に向かうと気分が重くなって、うつ病近くなる。東京でいうと会社のある新宿の方へ向かうと身体が震えてきて汗が出てくる、反対の八王子の方へ行くと気分がすっと良くなってすっきりしてくるというふうに、会社拒否病になるのです。これはただ、その人個人の成績ではなくて、社会全体がそれだけ余裕を持って子供達に接してきた証拠であるというふうに考えて、いい解決策を見つけなければならないのですが、私も良く知りません。

社会が十分に自分自身の力で働かなくても生きていける。それだけ余裕が出来た社会に日本が入っていますから、後に言いますが「ニート」という言葉が出来ました。イギリス

で出来た言葉で「Not in」って言いますね。「Employment」、働かない、会社に行かない、それから職に就かない。それから「Education」、学校行かない。それから「Training」、鍛錬をしない、練習しない、修練しない、努力しない。こういう子供達が出来て、働かないし、学校にも行かないし、それからトレーニングもしない。こういう子供達が生きていけるだけの余裕のある社会になってから異様に難しくなったとこういうふうにイギリス政府は言っていますけれども、これは若い人達の事だけではなくて、実はより多く、高齢者社会の人間達なのです。働かなくても、子供に頼らなくても、国が一応最低限度保障してくれている。余裕をもってもう生きれるじゃないか、死ぬまで面倒見てくれる、だからそうやって生きていこう。これは実は社会に寄生している。寄生虫になって生きているということを実上意味するのです。若い時に保険に金を納めなくても、若い時になんら働かなくても、老後は国が面倒を見てくれるとなるとこれはどうでしょうか。

私は嫌でしたが、私は割と良い家に生まれました。だけど、家の仕事を継ぐのが嫌で逃げ出して、したがってだから家から一度も金を引き出そうとか、父母に頼って何かをしようとか思った事がないとか思わないようにして生きてきましたけれども、そういうのと少し違う人類が生まれてきたし、私達の仲間にもそういう人達が生まれてきたって事です。ちょうど私達の父母達がそういう世代の走りです。年金を積み立てなくても年金が貰えた世代。うちの母にそういう事は言いませんでしたが、母は沢山現金を持っていましたけれども、年金もちゃんと貰っていました。そういう世代を経て私達の世代にくると社会はそれだけ余裕がある社会。したがってそういう余裕は当然のものであるというふうに考えるとまた違った人間がでてくると思います。そういう事を考えないで実はやりたい事をして、やりたい事を見出していく。これが一番難しいです。私はやっている事をどんどん積み重ねていくとやりたい事が無くなっていく、おまえそんな簡単な事じゃないよとその通りであります。というのは、私は勉強が好きではあるとは思わないけれども、勉強トレーニングをずっと13歳くらいの時から26歳くらいまでやっていました。今でもそれをやらないと身体がおかしくなります。だからある意味でいうと病気かもしれません。だけど、農家をやっている人も、それから職員の人もあるいはパートで勤めている人も、私はそれほど変わらないのではないかと思います。

私の知っている曾野綾子さんという作家は、お父さんとお母さんの仲が悪く、お母さんはお父さんとの離婚を考えて何回も自殺を図ったそうですが、娘を道連れにしようとするので、したがって小さい時から曾野さんはお母さんから離れることは出来ないけれど、どうやって自殺を逃れるかということを考えて、そのためにはどうしたらいいのか考えたら自分で生きていく道を見出さなくてはならない。何か分らないけど小説家になろうと思ったそうですね。だから小説家になるためにはどんな事でもしたと言っていました。そういういわば自分のやりたいことを見つけるっていうのは、非常に困難な中でもあるいは楽勝な中でも色々あると思いますが、これは60歳であろうが70歳であろうがそんなに難しくないとします。

やりたい事というのは実は続けていって残るものであります。したがって時間的余裕が

あればやりたい事。スポーツでもいいし、それから他の事でもいい。出来れば少し社会と人と繋がる事をやればいいと思います。私は曾野さんと何度か一緒に色々な所に行かせてもらいました。ボランティアです。富山県の竹を切りに行くとか、あるいはらい病の人達の所に治療に手伝いに行くとか、それからミャンマーに薬を届けるとかですね。「こういう事をやってボランティアってどういう意味。自分の好きな事やってさ」と言ったら、「あれは自分が好きだから。こんな素敵な事を人に任せたくないからやる」これが曾野さんの考え方ですけど、僕はすごいなと思います。だからいつまでたってもあの人は、自分自身もうボランティアの対象になっているのに、足は悪いし、身体も太ってくるし、心臓も悪いし、美貌も衰えてきて苦しいけど、でも自分はボランティアの対象にならないで楽しいからボランティアをしようと今でも思っていてやっている。すごいなと思いますけれども、若い時からの習慣なのです。何とかして私は人の役に立ちたい、何とかして人の出来ない事を少しでもやりたい。出来ない事って言ったら変ですが、私に出来る事、それは私の好きな事。

私は10年間長沼町に住んでいて、身体障害者施設の理事長をボランティアでやっております。好きだからやったのですね。大変な時間とお金が必要ですし、職員の方に嫌な事も言わなければならない。よくよく見ていたら職員の方、ボランティアを人には要求するけれど、自分は一度もボランティアしようと思わない。自分の仕事でボランティアするというのは、あまり気がつかないのですね。だから自分の仕事とまた違う仕事で一つボランティアをするということを考えられると非常にいいなと思います。障害者にしても「君は、ぼーっとしてないでさ、手足は動くのだからあっちのゴミでも拾って歩こうよ」と言ったら、「私達障害者にそんなゴミを拾わさせるの。理事長横暴だ」と言われましたけど、仕方ないですね。でも本当は、車イスの人でもボランティアしようと思ったら、どうやったら車イスに乗って、車を押してくれる人の楽な様な姿勢で自分が頑張るのか。実際は難しいですけどね。そういう事をよく私は障害者の方とは話ながらボランティアさせてもらいましたが、でもしんどいです。そういうふうにして、いわば自分のやりたい事だけではなくて、少しは自分が社会に結びついていることを出来ればいい。行政の手伝いすることもいいですし、それから人が嫌がらない程度に様々な社会おこしのようなことをするのもいいと思います。こういう事は長く続いていくと習慣になって、やりたい事になっていくのではないのでしょうか。自分のやりたい事を見つけるというのは、本当にそんなに難しい事ではないのです。ないと思うだけではなくて、それは自分のやっている仕事を大事にすることとはまた別にもう一つ二つ三つやっていると自分の仕事をやっている事もすごく楽しくなります。

私達は一応りタイア組であります。でも私はお金をもらう、労働の対価に何かをもらうという仕事を選びましたが、仕事は同じ様に続けていくほうがいいと思うし、続けていく事が出来ると思います。それがやりたい事であるかどうかという事はなかなか自分では判断出来ませんよね。判断出来なければどうするかというと、全然違う事をやって、楽しそうにしている人を見ることですね。ここにも書きましたけど、「人生の楽園」というテレ



び番組があります。あの番組を見ていると、自分が退職してから、これまでやりたかった夢を叶えたいと言って田舎に住んで、そして夫婦で頑張っている。大変忙しそうですね。そして、皆何か儲ける仕事をしています。それは全然私は悪いとは思わないけれども、そういうやり方もいいけれども、なんでこの人達はこんなに苦勞しているのだろう、なんでこんなに困難を自分で背負っているのだろう、なんでそんなに人が好きなのだろう。人と人は交わらないと楽しくないと言いますが、私はそんなに思いません。楽しむというのは、色々なあり方があります。エピクロスという人は快樂主義者と言われています。ギリシャ時代の人です。快樂主義と言われているけど、快樂の仕方が違うのです。エピクロスの快樂というのは、どういうことかと言いますと、必要以上のものを自然から撰取しない。食べない事ですね。必要以上の労働をしない、必要最低限の労働をする。そうすると人は身体も健康だし、心も煩わされない、社会の人とそんなに付き合わない。自分の処理出来る範囲の人とだけ付き合う。これがいいかどうかは別としても、つまりエピクロスという人は快樂主義と言いますが、まさしく禁欲であります、ダイエットであります。エピクロスの園で共同生活を行う、お互いに邪魔しないようにしてですね、今の共同社会ですね。それから村落共同体、人と人が結びつく社会というふうに言われていますが、煩わしいの反面、楽しいの反面、色々ありますから一概には言えませんが、「快樂」～人の楽しみというのは、どこに潜んでいるか分からない。それを長く続けてみると初めて分ります。こういうふうにと考えると私たちは、自分の好きなものを色々な視点から眺めてみて、色々な観点から眺めてみて、これはいいなと思えるものを発見する。時間をかけて発見する。それは老後って言ったらいいなかな、退職後に必要な事なのではないかなと思います。何でもいいと私は思います。そうすると、自分は今日起きて何をしようか迷う必要はないし、それをした後、別な事また何か一つ出来るかなと思えるし、身体が続かなかつたらもう止めようでもいいし。先程も言いましたけれども、朝起きて一日の計画を立てるというのは、つまらないような事ですけども、毎日毎日自分の身に刻みつけていくのですね。

私は自分を単純な人間だと思っています。大学受験の時に、一日「四当五落」と言って、4時間寝たら大学に入って、5時間寝たら大学落ちると。それが受験地獄であるとか競争であるとか言われましたが、どういうふうにやったらいいか分からなかったから、カレンダーに8時間以上勉強したら◎、6時間以上は○、5時間くらいは△、3時間以下は×をつける。そうやってずっと大学に入ってから、研究生活している時もやってきた。今はもうやっていませんけどね。今はむしろ夢中になってやりすぎるのを止めざるを得ないくらい。もう足腰立たないし、腰が痛いですからね。眼がかすんでくる。だから身体的にストップせざるを得なくなりました。そういうふうな習慣を身に付ける。私のようなやり方をする必要はないですが、「今日何しよう」それだけでいいのです。そして「書く」。出来るか出来ないかは別にしても、それを書いていくと自然とそういう道筋が自分の前に出来てくる。これは人間の特徴であると思います。老後の特徴かもしれません。

先程、市長さんとお話して、砂川という所は見事だと思います。私は都会に住みたいと思ったことは一回もないです。厚別という所は人口五千、札幌市に編入されて大変貌しま

したけど、私が1960年くらいまで居た時には人口は七千人くらい居ました。本当に田舎町で全村人の名前が分る。私の家は米屋をやっていました。誰の家に誰が生まれたかすぐに分るのですね。逆に向こうからも分る。私がいたずらをやったり悪い事をしたりするとすぐ親に知られて、校長に呼ばれて叱責をくらったり、そういう村でしたから嫌で嫌でたまらなかつた。でも、そういう所から逃げ出そうと思って行った所は大阪でした。そうですね、これくらい嫌な街はなかつたですね。人の心にずけずけと入ってくる。バイタリティがあるけれど、すぎましい社会です。外国よりもひどかったです。大阪弁は絶対にしゃべれないと思って、4、5年したら完全に大阪人になっていました。不思議でたまらなかつた。今でも喧嘩をする時と女性を口説く時、もう女性は口説かないですが、自然と大阪弁になります。身の内から出てくるのですよ。大学時代からの10年間くらいは大阪人でしたが、10年間以降は三重県の伊賀神戸という所、これは過疎地です。砂川なんか問題になりませんよ、長沼よりももっと田舎です。店なんか無い。急行は止まりますが、分岐点です。街灯もない。そこに8年間居て、札幌に戻ってきたけど父が亡くなったので、長沼に住んで30年になりました。ここは一人も人が居なかつた。過疎地です。全部自分でやらなければならない。電燈は北電が付けてくれましたけれども、後は自分でやらなければならない。そういう所に行きたいなど、そういう所ならいいなどと思ってやっています。ちょうど上手い具合に皆さんもそうですけども、インターネットの社会になっています。田舎にいても、原稿を書いてそれを郵送する、メールで送る。デジタル化してメールで送ることが出来る。東京の出版社とも、あるいは大学とも通信出来る。電話ではなくてFAXではなくてメールで出来る。どこにしようと、電気が通っている限り、電波が通っている限り、社会と切り離さない、切り離せないですね、最新情報が誰よりも速く自分でそこに辿り着こうとすれば、そこに辿り着くことが出来る。過疎地という誰もいない所に住んでいて初めて分つたのですが、高齢社会、なぜ高齢者が元気なのかという、一つはテレビが出来たから。これは黙っていても刺激がどんどん自分にやってくる訳です。いい側面だけではないのですよ。テレビで世界の情報が、もちろん選択されて都合のいい情報ばかりではないがやってくる。それからコンピュータですね。これは自分で、個人的に接近していけばどこまでも行くことが出来る。私達の大学時代に、例えば私は、カントとかヘーゲルとかドイツ哲学者の研究をさせられた。論文を書かないと、大学は受け入れてくれないし、研究者にもなれないと言われた。ドイツから原書を取り寄せようと思ったら、紀伊国屋とかに頼んだら、大体1年くらいかかる。しかも高い。一冊これくらいで1万5千円くらい。そのころ大学卒の給料が1万5千円くらいでしたから、とんでもない額ですね。買うためには一か月くらいアルバイトしないと駄目でした。自分が論文書き終わった頃にやってくるのですね。だから原書を見ないで、学校の本を写してやりました。それはそれで勉強ですけども。今はアマゾンに注文したら、外国の本でもどんなに遅くても一週間以内に入ってくる。日本の本だったら、大体翌日届きます。そういう時代になりました。

それからもう一つは、車です。年寄りになって一番しんどいのは足の自由が利かなくなる事です。だから移動の自由が確保出来ると、これは全然違う世界が生まれると言ってい

だと思います。砂川という所は、市長さんのお話によると、面積も非常に広くない所だと言います。それでも一日一人で歩く距離、大体行って帰ってくる距離が端から端までだと思います。長沼も厚別もそうでした。私達の小さい時の自治体というのは、人間の足一人で帰って来れる所です。それが一つの独立した自治体でした。それが、まだ明治以降、あるいはもう少し言いますと大化の改新以降の律令制度以降ずっとそれが続いている。一人の人間が足で歩いて行って帰って来れる。それが一つの共同体、自治体でしたが、今は長沼は端から端まで車で行ったら30分かかります。砂川もそうだと思う。つまり私達の小さい時の厚別や砂川っていうのは、実は今の北海道くらいの広さだったと思います。それくらい空間が広がり、人の行き来は逆に言うと荒くなっただけでも、それくらい稚内の人とも斜里の人とも付き合える。

車で移動出来るということは、私達の足の代わりになって好きな所に自由に行くことが出来る。私を含めた年寄りが、高齢社会でいきいき出来るのは、もちろん健康や病院を含め治療体制、それから老後体制、老人医療、そんなのが管理してくれる、保険が管理してくれる、色々あるけれども、実際いうと、今言ったように、テレビであり、それからパソコンであり、それから車であり。車は危険だと言う人がいますが、自転車は転びますけど、車は転びません。車は停まればいいのです。自転車は停まると転びます。僕は自転車よりも車のほうがずっと今は危険率は少ないと思います。お金がかかるのはその通りですけどもその分、砂川から知床まで行ったりして、そういうふうな自分自身の好きな事をする範囲がうんと広がったのではないかなと思います。

つまり、故郷と書いてホームタウン、かつて私達が住んで、そこで友達が出来て顔見知りになって、そしてそこで友好的に付き合える、そういう世界が、かつての市町村、あるいは村からうんと広がって、北海道は一つになったというふうに考えれば、非常に上手くいくと思います。私は大阪に住んでいたのですが、たまに大阪の店から「今日何処にいるの」と電話がかかってくる。「家にいるよ」と言うと、「大阪は待っているよ。客が誰もいないから、潰れるよ」と脅されて、飛行機に乗って行くのですね。そういうふうにして、昔の友達も大事にしながら、自分のいわば行動半径、あるいは活動半径、思考半径を広げていくことが出来るのではないかなと思います。

それから更にもっと言えば、実は芽生えというのが、老人の命をうんと長らえるというかそういう役目を果たしている。私達が生きるのは、実はライフというのはいきいきという意味であります。いきいきとしているのはライフです。生きていくけれども、命があるけれども、ぼーっとして何もやりたくない、というのはこれは死んだ訳ではないですけども、生命活動を辞めた訳ではないけれども、生命活動が沈滞してそしてもう社会に向かって自分の意思を表明するというそういう気力が無くなったそういう状態です。自分自身がやる事が無くなって沈滞してもう動きたくないとなるとこれはもう大変ですよ。人が何と言おうと駄目ですよ。何か刺激があればすぐ変わりますが、でもどうでしょう。他人の刺激じゃなくて自分自身の刺激で動き出そうとする。そういう事が非常に重要ではないかと思います。

それが実は、これがちょっと難しい事ですが、「自由」とか「平等」とか色々言いますね。「自由」と「平等」の関係で一番名言を吐いたのは、福沢諭吉さんの「学問のすゝめ」という本です。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」その後「と云へり」というから実は誰かが言ったと書いてありますけども、これは福沢さんの考え方でもあります。「学問のすゝめ」は人間は生まれながらにして平等であるということを宣言したのです。教科書にはここまでしか載っていない。その後、とても露骨な事が書いてあります。「しかし現実には世の中には富める人と貧しい人がいる、賢い人と愚かな人がいる、高貴な人と賤しい人がいる、どうしてか」これからが福沢諭吉さんの真骨頂、根本ですけども、「富める人は学んだから、賢い人は学んだから、高貴な人は学んだから、そうじゃなくて貧しくて賤しくて鈍な人はこれは学ばなかったからだ。したがって学ぶという事によって人生は開ける」、学ぶという事は、実学って事で働くって事です。労働者です。別に手で働くとか、脳だけで働くとか色々な事がありますけれども、自分で自分の生活を背負っていくということでもあります。ちょっと面倒臭くなりますが、私の説というか、私が考えた事ですから、皆さんに強要するつもりはありませんが、ちょっと脅かすために言いますけれども、なぜソ連の社会主義が崩壊したのか。色々な原因があります。あれは人間は自由で平等で平和でそして抑圧のない社会がいい、そういう社会である共産主義社会を実現するんだ。もったいもんですよ。したがって個人の勝手気ままに処分できる私有財産制度は廃止しましょう。私有財産制度の廃止といいます。したがって財産は共有化して貧富の差を無くしていく。こういう共産主義の考え方は素晴らしいという人がいらっしやいますけれども、私は間違っていると思います。なぜ間違っているかという、人間の自由とかやりたいことをやるという根拠にあるのは、自分の意思で自由に処分出来る私有財産制度の下で初めて可能なのです。自分の土地も家も家族も共同体に属していて、共同体の命令によってそれが破棄される、奪われる、そういう社会、国家には意思があるけれども、個人には自由な意思があっても自由がない、そういう社会は人間のいわば本性・ネイチャーに合わない。ちょっと難しいですけども。人間の本性に合わないってどういうことかと言いますと、私有財産というものは人間が自立し、自存し、自分の意思で生きていこうというものの基本なのです。したがって共産主義社会がどんなに美しいことを言ってもそれが実現したら悪夢です。人間の自由がないから。私の意思が社会全体の意思にすり替わってしまう。そういう社会になるのだということです。自分の最終的な自分の意思を決定できるのは、自分が自由に処分できる私有財産を持っている、それは自分の労働の成果、自分が働いてそれを獲得した成果、これが自立の基本です。福沢諭吉さんは「私立活計（しりつかつけい）」と言いました。自分で生活していく、その生活を自分の意思でやっていく、私立活計ということが出来なければ、個人も社会も成り立たない。したがって国にパラサイトしたり、寄生したり、それからニート、働くことも学校へ行くことも、トレーニングすることも嫌だ。そんなことしなくても自分でやって行けるというふうになれば、人間はおのずと自分で自分の意思を実現する基盤である所有を失うから、したがってそういう人はお父さんがいなくなれば、あるいは周りの人がいなくなれば社会が困ればやっていけなくなるのです。北欧の

社会保障はものすごく手厚い保護の下にありますね。税金を全部入れると大体60%くらいになるのです。そういう社会というのは、私は望ましい社会だと思います。私達は自分で働いて税金を払って、その余りで自分自身の生活をやっていく、家族を養っていく、こういう基本的なスタイルを身に付ける。だからもう少し言いますと、実は、年金制度というのは、家族を解体させる、家族が結合していくことを、内外から弱めていく基本なんです。親の面倒を見なければ子供には俺の財産はやらないぞ、なんていう制度ではなくて、子供に世話にならなくても親は年金で暮らしていける。これいい社会ですね。だけど家族と家族の結びつきはそこで無くなります。親は子供に頼り、子供は親に頼っていくという相互循環が無くなっていく。

大学に来る人に、「大学に行かなかったらどうなりますか」と聞かれるから、「大学に行かなかった理由を聞かれるよ」と言います。行かなかった理由って何かと言いますと、皆さんは履歴書っていうのをご存じでしょ。履歴書に空白の年月があったら、これが問題になります。1993年から94年、93年に会社を辞めて、95年からまた働き出した。この1年間何をしていたか必ず聞かれます。この人この1年の間に刑務所入ったのかな、精神科の医者に雇ったのかな。精神科だって治ったらどうってことない、その通りです。だけど私の経験では十中八九、何かストレスがでるのですね。私の同僚ですごい心理学者で良い先生がいました。でも何かおかしくなって、履歴書を見たら1年間空いていて、しまったと思いました。調べたら既往症があった。それで廃人になりました。こういうふうに自分の生活も含めて、他人の生活も含めてですね、注意深く観察していくことが重要。だからその人が良いとか悪いとか言おうとしているのではなくて、私達はいつも自分の生活は自分自身で組み立てていくという、そういう努力をするかしないかであります。つまり他人本位にするかしないかですね。しかし社会全体のレベルが上がってくるとセーフティネットワークと言って、老人、働けない人、それから子供、子供を産む人、こういう人達を社会全体で扶養していかなければいけない。これはその通りであります。しかしそれが程度が過ぎると社会は働く必然を感じなくなる。誰でも東京大学入れますよ、誰でも東京大学でたらいい職業に就けますよと言ったら、これはもう東京大学の意味がなくなる。ハーバード大学って世界で一番いい大学って言われています。本当のところは分かりませんが。ハーバード大学の大体4割くらいは実際の試験ではなくて王様の子供とか外交官の子弟、官僚の留学生、官僚になった人。でも個人であそこの大学受けて個人であそこの大学出るといったらとても難しいです。アメリカに住んで生活していない人はとても難しい、そういう大学ですね。東京大学は全員同じです。総理大臣の娘だろうが、皇室の子女であろうが試験受けなければ入れません。だから良いと言っている訳ではないのです。そういうことが日本の社会の習慣になっている。これは簡単には壊せないが、しかし今さっき言ったように国全体が豊かになるとパラサイトしても生きていける、その比率が大きくなると地方自治体であろうが、家庭であろうが、夫婦間であろうが。一番気持ちがいいのがこういうことではないでしょうか。亭主が、年収2千万だと。「私はあなたに養われているのではなくて、あなたのお金を使ってあげているの。あなたにパラサイトして何が悪い

の」そう言われたらムツときますよね。子供が「うちは金持ちだから使っていていいじゃない。子供なんだから使う権利がある。どうせ遺産相続したら貰えるんだから」と言われたらカチンときますよね。こういう社会全体がそういう雰囲気にならないように、私達は気を付けなければならない時代にすでに入っているのだというふうに思っています。これが高齢化社会の病気だと思います。そうじゃなくて高齢化社会を、こういう家庭を通して上手くバランスをとって行くのだなと私は思います。バランスをとるためには、だから高齢者も自分の出来る事で自分自身の生活を組み立てていく工夫をしたい。

ドラッカーは74歳まで賃金労働です、賃金もらって働くことが出来る。65歳あるいは60歳までよりも速度は半分かもしれない。だけどそれまでの経験があるのだから。社会は確かにそういうふうに動いていますね。65歳でも給料は下がるけれども、一人前の給料は貰えるようになる。大学でも65歳過ぎると大幅にカットします。ボーナス分だけ無くなる。2/3になる。そして、近くなると「先生もう辞めたらいいじゃないですか」と。辞めざるを得ないのですね。もう歳取ったらいらぬ。そうすると少しでもいいから年金だけではなくて自分の力で生存していくための何か工夫をしようとする逆になるとフェイトが沸いてきて、自分のやりたい事だけではなくて、やらざるを得ない事、その事を工夫して自分のやりたい事に転化していく。こういうふうになるのではないかと思う。私も実は経験上言いますと本が売れる時はどこの出版社でも出してくれました。でもこの歳になると自分自身の力で色々やってきた事、これだけはちゃんと残しておきたいなという仕事があります。それは出版社はもう出してくれません。それは、先生の娯楽でしょ、趣味でしょというものです。趣味だから自分で出してください。そうするとどうやって出したらいいのかというふうになります。ワークっていうのは、働くだけではなくて、業績・成績挙げる、成果であります。ワークっていうのは、8時間労働することがワークではなくて、ちゃんと成績を残す事です。こういう事を頭に置いて皆さんの生活設計を立てると、単にやりたい事をやっているだけではなくて、やるべき事、少しでも社会に繋がる事、子供に残しておく事、そういう諸々の事に繋がっていくのではないかなと私は思います。思うだけではなくて、そういう事をするとやっている事はたいした事ではないのですが、だけど、そういう事をやる事を通じて自分は生きているんだ、いきいきと生きているかどうかは分からないけど、自分なりに頑張っているんだ。忙しいだけで終わらないんだ。

最後に言いたい事は一つ、人間はたった一人でも楽しむ事が、別に特別お金をかけなくてもやれる事があるのです。私の奥さんは、必ず朝起きたら本を読んでいます。たいした本じゃないと思います。私の本は一冊も読んでくれません。死んだら読んであげますと言われている。夜寝るときも必ず本を持って寝ます、1時間くらい。持ったまんま寝ているのが半分くらい。黙って本を読んでいる。私の持っている本は絶対読みません。同じ本でも、自分で買って読む。自分の気に入った本だけ、自分で買って読むんです。それはどういう意味なのか、私は解ります。あなたが読んでいるから、私だって読む権利はあるわと言わないけれども、私だっておもしろい事やりたい。自分の世界で。これは人間だけが

する事です。ある偉い学者、ギリシャの学者はですね、「人間だけにする事は何かと言ったら、読書だ」って言いました。犬もしない。大袈裟な言い方ですね。だけど本当に本さえあれば、一冊あれば。

最近出た「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」という本は面白い本です。私は仕事で読みました。仕事で読んでも面白い。仕事で読むから逆に言うと集中して読むから面白い。本は集中しないとなかなか読めません。テレビはダーッと流れていきます。映画はある程度お金を払っているから、少し集中して見ますが、それでもダーッと流れていく、自分の好きなところだけ見る。でも本は、本当に集中しないと読めない。今の若い子達、学生達は本を読まないと言います。本という紙の媒体はないけれども、活字は沢山読んでいます。スマートフォンでも読んでいますしね。だから、別に紙の本を読む必要はないかもしれませんが、でもどうでしょうか。歳を取って、メガネをかけて、テレビを消して、毎日、「今日はここまで読もう」と決めて読むというのは、なかなか面白いのではないのでしょうか。沢山良い小説家が日本にはいますよ。司馬遼太郎さんの本なんかは、これから10年間くらい読んでも読み切れないくらいの本。池波正太郎さんもこれから10年間くらい読んでも読み切れないような本を書いています。藤沢周平さんは3年くらいで読めます。というふうにしてやっていると、120歳くらいまで生きないと自分の読みたい本が読めない。これは楽しいなと思っていける。もちろん本は高いです。でもどうでしょうか。今日500円で買ってもらった本は、コーヒー1杯分です。コーヒー1杯でもいいわと言われれば、何も言えませんが。でもどうでしょうか。いきいきと生きるという事は何か自分に刺激を与えられるという事ではないのでしょうか。歳を取ったから、本はもう面倒臭い。若い時、読めなかったから本を読みたいと思うけれども、実は暇があるから本を読める。これは逆であります。暇があるから楽しい遊びが出来る。これも逆であります。暇がないから本を読むのが楽しいのであります。暇がないから遊ぶのが楽しいのであります。私の知っている限りでも、大変忙しい時に、1週間に1冊本を書かなければいけない時に、途中1日だけサボって、とにかく何処かへ行ってワーッと叫んでくるだけでも楽しいですね。襟裳岬で森進一の歌を歌ったら怒られるから島倉千代子の歌を歌って帰ってくるとかね。こういうふうにするだけでも楽しいですね。暇があるから本を読むのではなくて、暇がないから本を読むのが楽しいなという事が、残念ながら真実でして、したがって、暇がいつまでも続く老後に本を読むのは大変だなと思います。でもどうでしょう。今日、鷺田小彌太という変なおっさんに会って、「あいつは汗を流しながら1時間半しゃべっている。可哀想だから1冊買って読んでやろう」というふうに思ってくると非常に嬉しいです。同情や憐れみから、興味が繋がっていくという例もなきにしもあらずですから。自分の周りに本を置いていくって楽しいですよ。僕のように読んでいない本が沢山積んであるのは辛いですけどね。でもそうやって自分の世界を少しずつ広げていくと自分の目に見えるものだけではなくて、自分の周りに広がっていくのではないか。それに、ランクのちょっと上がった本を読むと恰好がいいですね。司馬遼太郎さんの本を読むとそんなにランクは上がらないけれども、ロマン・ノワールの本を読んだりですね。一人でも楽しめる事を

持つということは、読書に優るものはないと私は思います。

それからもう一つは、砂川市は来てみたら、すごく立派な所ですね。ここの課長さんに聞くと、人口約2万人いると言うし、市長さんに聞いても、砂川は特別この界隈でいい所なんだと。皆の羨望の的なのかもしれませんけどね。でも私の考え方は、自治体は北海道で一つでいいという考え方です。道州制です。北海道は一つにして、各小さな所はそれぞれの市町村を衣替えして色んな形で連携していくというふうに造ると、面白い北海道が出来上がるのではないかと思います。でもこれ大変難しい。世界でも道州制みたいなことをして成功したところは一つも無いです。どうしてかという、みんないい所に集まっていくからです。砂川が空知で一番良かったら、これ一つの自治体にしたら、みんな砂川に移ってきます。砂川の成功が非常に平均化されて、平準化されて、元の木阿弥になるかもしれない。だからものすごく難しい。だから、道州制が一概にいいとは言えないけれど、先程言いましたとおり、人間が足で歩いて、お互いに face to face、顔と顔を合わせて生きていく世界が私達の自治体の世界、50年前の世界だとしたら、現在は、北海道は一つぐらいが、face to face の世界だと。実際に見る事は出来ないうですけどね。しかしお互いにメールやテレビで、お互いにその他の情報交換をしてやっていける世界になったんだと。そんな中で私のやりたい事は何なのかということのをこれから何年かかけて模索して、これなら出来るということを見つけていけることは良い事だと思う。そのためにも、読書を通じて色々な事例があるのだということを知ることも重要ではないかと思います。

本なんて頭の中の事であるというふうにと考えると私は逆だと思います。そうじゃなくてどんな過疎地にも、どんなへんぴな所にも、あるいは都会の真ん中にも、人はいつも自分自身の想い、想像の世界の中で何かをつむぎ合っている訳ですから、そういう想像の世界に刺激を与えるようなそういうものっていうのは、テレビや映画や音楽やラジオ、そういうものとは違う、私達の意識をぎゅっと追いつめるようなそういうものをいわば皆さんに持ってほしいなと思います。

私は、図書館で読書運動やっている、あれは大嫌いです。本を書いている者から言いますと、今やっている図書館というのは著者の本をタダで人に与えている、嫌なサービスセンターだと思う。そんな事を図書館学会なんかで言ったら、ブーイングされました。でもそういう側面がある。本は自分で買って自分の身の内にしていく。私の奥さんが素敵だなと思うのは、自分の読みたい本は、自分で買って、自分の意思で読んで積み上げていく。捨てるのも自由だし、買うのも自由なのですね。そういう意識が私達はいきいきと生きていく知恵に繋がっていくのではないのかなと思います。

最後ですが、この紙にも書いていますが、私は30年弱前に、長沼っていう所の馬追山の中腹のほとんど人のいない、今は100人以上居るんですよ。その頃誰もいなかった所に住んだんですよ。良かったですよ。石狩平野がバーンと見えるのです、真ん中は札幌岳から恵庭岳、樽前から手稲山まで全部見えるのですね。そういう所に住んで、真っ暗な所で満天の星を見ながらいいなというふうに。25歳くらい時でした。いいなと思いました。あっという間に過ぎてしまいましたけれども。今はたいした過疎地では無く、まあ、過疎



地ですね、交通機関がありませんから。でもそこで一つだけ心に決めた事があります。その頃割と収入がありましたから税金も沢山払っていたはずですが。自分の税金は分かりませんが、行政というか、町役場に行ったり、議員さんと話したり、そこに何かを要求したりするのは止めよう。つまり、行政に口出ししないというか、手を出さない。身体障害者の施設の理事長を10年間やりましたから、会わなくてはならない事がありましたが、そういう事は園長さんに任せて、私は行政から何かを要求するのは止めようと思ってずっとやってきました。それが良かったのかどうかは判らないです。25年経った時に初めて水道が通りました。うれしかったですね。私自身はここに長く住んできたからご褒美のかなと思いました。行政っていうのは、与えられるもので、自分から要求しない。私の年寄り友人に曾野綾子という小説家があります。大変良い人ですけどね。曾野さんは「「くれない族」って知ってる？」って言うのですね。あれしてくれない、これしてくれない、ああもしてくれない、こうもしてくれないと行政に文句を言って色々な事言う人達の事です。それが悪いと言っている訳ではないのですが、それが過ぎると、みんなが「くれない、くれない」と言うと行政はストップしてしまいます。実は行政から沢山もらおうと自分の自立心、「じりつ」というのは二つあって、自分で稼いで自分で生きる。それから、自分の行動を自分で律していく。これは自己責任ですね。子供がいじめに遭ったらどうするかということも大変難しい問題です。うちの子供も恐らくそういう目に遭ったのではないかと思いますけども、そういう時どうするかっていうのも含めて、普段から考える。突然そんな事起きて、何も知らなかったというのはどうでしょう。親の責任ではないでしょうか。というふうにして、「じりつ」ということをそこまで含めて考えていくという事が重要で、自分で処理出来る事は自ずと知れています。そんな事考えたからと言って出来る訳ではございません。だけど、「じりつ」には二つあって、「independence」自分の働いたもので生きていく。それから、「autonomy」と言って自分の意思「self-control」で生きていく。この二つを基本において、私達が生きていけば、北海道に生きようが、ニューヨークに生きようが、何とか生き延びていくことが出来るのでは、何とか上手く歳を取って、いきいきと生きていけるのではないかなというふうに私は思っています。

71歳ですからもうそろそろだと思っています。あと4年くらい経つと書きたい物が全て終わるので、その辺でぼっくり逝ってくれればいいなと自分では思っています。そんな事言う奴に限って長生きすると言われてますから。私の好きな小説家で大西巨人という人が93歳ですけどまだ生きている。その人に「閉幕の思想」というのがあります。私の好きな経済学者で岡崎次郎という人はある日82歳くらいですか、夫婦で誰に何も言わず気配を消して、亡くなったんですね。そのまま行方知れず、もう30年くらい経ちますか。大西巨人さんは閉幕の思想を言っていたけども、まだ生きていますからまだ閉幕しない。もう自分の力じゃ死ねないかもしれないけども。自殺がいいって言ったらいけないですよ。自分で自分の人生をどうやって締めくくるのかという事もあなた方のあるいは私のいきいきと生きる事の中に入っている。生きるということは実は死ぬ事。私、3年前前に出版社がつけた名前ですごく嫌ですけど「理想の逝き方」、逝き方って死に方ですねという本を色ん

なケースを100人くらい挙げて書きましたが、色々な人を見たけれども、すごい逝き方をしたのは、例えば長谷川町子さんですね。最後は自殺なのですね。自殺じゃないけど自殺なのですね。死ぬって言わないで死んだのです。非常に微妙ですけど、そういう何か自分の人生を自分で終えるというそういう逝き方も自分の人生の勘定の中に入れておくと、ここまではとにかく自分は頑張ってるんだ、こういう想いになる。私の母は、絶対120歳まで生きて、おまえが死んだ後の葬式までちゃんとやってあげると言っていました。残念ながら12月の暮れに風邪を引いて、熱をだしたんでしょうね。脳溢血になって84歳で死にましたけど、残念でした。だけど母がいきいきと生きていたのは、「絶対120歳まで生きてやる。おまえなんかには負けないで生きてやるんだ」変な言い方すると「根性」そういう想いがあったのかなと。私はそういうような想いはありませんけども、せめてあと3年くらいは生かしてほしいなと思います。皆さんはどうですか。あと何年くらい生きてほしいなというふうに計算をして、そこまでまずlowで走るのかsecondで走るのかthirdで走るのかtopで走るのかという事も考えて、元気に生きてほしいなと思います。

私の雑ばくなお話はこれで終わらせて頂きたいと思います。

#### 【司会 藤原 佐智】

鷺田先生、ありがとうございました。

先生のお話を皆さんと一緒に聴きまして、私の事ですけれども、料理が本当に苦手だったんですよ。ただ結婚して10年弱、毎日必ずやらなければいけない習慣になっていまして、今ではどういう気持ちの変化かですかね、料理教室に通うまでになりました。ただ先生のお話を聴いて毎日かかさずやる事でそれがやっぱり習慣になり、苦ではなくなる。そして毎日必ずやることあるということが幸せなんだというお話を伺って、考え方ひとつでそれが楽しくも苦しくもなるんだなと私自身感じました。やはり苦手意識を取り除くことで今の生活自体ももっと楽しく、そしていきいきと暮らすことが出来るのではないのでしょうか。

さあ、まだお時間も余裕がございます。只今の講演をお聴き致しまして、会場の皆さんから鷺田先生にご質問があればお受けしたいと思います。どなたか先生に質問がある方がいらっしゃれば、挙手をお願いいたします。折角、先生いらっしゃいますのでぜひお話伺って質問があればお受けしたいと思います。どなたかいらっしゃいませんか。今のお話で十分満足ということでしょうか。

それではですね、折角ですので、私の方から先生にひとつ質問をよろしいでしょうか。

実際に、いきいきと生活をしようという意識の高い方というのは割と私の周りでも私の親世代でも女性が多いようにとても感じます。男性というのは会社を退職した後に家に引きこもりがちになるというふうに伺うことが多いのですが、そもそもそのいきいきと生活していきたいという意識の差というのは、男性と女性の差というのはあるものなのでしょうか。もしあるとしたら、特に男性が今後いきいきと暮らしていくために先生だとどういうふうに心掛けるというふうに感じていらっしゃるか、ちょっとお話頂ければと思うので

すが。

**【講師 鷲田 小彌太】**

たいした意見ではないですけども、私の一番感じている事は、早く死んで私の奥さんを楽にしてあげたい。実は私の母は素敵な母でしたが、69歳の時に父が亡くなったんですね。通夜から葬式まで母は満面の笑みを浮かべていました。あれは忘れられません。

やはり日本の社会は、良い悪いは色々あると思うけど、職場でも社会でも特殊な職種を除いては、男性社会ですね。僕は何が一番嬉しいと言っても、男に生まれた事。しかも女兄弟4人の3番目で一人。とても大事にされた。食べる物も違いましたからね、兄弟で。今の子供はそうじゃないですけどね。だから僕の実感としては、色々ご婦人を見ていて、やはり亭主より長生きしてほっとした。そういう気持ちの人が9割9分とは言わないけれど、9割以上はいるのではないのでしょうか。これは若い時には感じなかった事ですけど、若い時には当然私の方が早く死ぬとと思っていましたから。間違いなく私は早く死ぬと思えますから。なるべく早くこの世を切り上げたら、人も喜ぶだけじゃなくて、奥さんは喜ぶんじゃないかな。あの満面の笑みというのはそういう意味じゃないのでしょうか。アナウンサーの方はどうですか。旦那が亡くなったら、満面の笑みを浮かべると思いますか。

**【司会 藤原 佐智】**

私の年齢ですと、まだもう少し頑張ってほしいと思いますが・・・。

**【講師 鷲田 小彌太】**

そりゃ、そうですよ。頑張った末ね、想像です。

**【司会 藤原 佐智】**

そうですね・・・。

**【講師 鷲田 小彌太】**

だって女性にどれくらい過酷な。いや、それは動物ですからね。子供育てることは楽しいけど。僕は別な考え方持っているのですね。子供が生まれてから女性は大変しんどい目をするだろうなと思いますけども10何年間、子供を人質にしてですね。あれはおもちゃですよ、楽しく過ごせる。僕達は子供というものはやっぱり異物ですからね。自分の子供であることに自信があるかどうかも別として、そういう事を考えますから、ある意味言うと子供は母親のものでしたらね。これはすごいなと思います。というふうに今度出した本に書いたら言い過ぎだと言われまして。女性に生まれていいなというふうに書くのはまずいんじゃないかと言われて少しだけ訂正しました。

**【司会 藤原 佐智】**

私としましては、夫と共通の趣味を持って小さいながらもこう共に楽しめるような老後を送りたいと考えていますが。

**【講師 鷺田 小彌太】**

そんな事は、絶対奥さんが嫌がるよ。それは間違いだ。今から訂正したほうがいい。

**【司会 藤原 佐智】**

そうですね。では、私の理想ということで。

**【講師 鷺田 小彌太】**

それは理想じゃなくて、現実離れし過ぎています。

そういうふうにしてね、旦那さんをおだてて生きるのも一つの手ではないかと思いません。

**【司会 藤原 佐智】**

頑張ります。

鷺田先生、ありがとうございました。

それでは今日の素晴らしい講演のお礼にどうぞ皆様、先生に盛大な拍手をお贈りください。ありがとうございました。

以上を持ちまして、本日の記念講演会を終了させていただきます。長い時間お付き合いいただきまして誠にありがとうございました。

なお、お渡ししております封筒の中にアンケートが入っていますので、どうぞご協力をよろしくお願い致します。

お帰りの際は、お手回りの品をどうぞ今一度ご確認の上、お忘れ物ございませんよう、お気を付けてお帰りください。本日は誠にありがとうございました。